
僕らの距離

高山 佑人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの距離

【Nコード】

N3155A

【作者名】

高山 佑人

【あらすじ】

——18.44m：これが僕らの距離。とても遠くて、苦しくて、切なくて——ある日の朝。栄口と水谷のラブラブ登校シーンを見てしまい、ショックを受ける三橋。しかしそのショックがとんでもない勘違いにつながって…！

――18・44m…これが僕らの距離。とても遠くて、苦しくて、切なくて――

「三橋い！」

ドンッ！朝、後ろからイキナリどつかれた。

「いたたた…：たっ田島くん！」

田島くんは僕の所属する野球部の4番。すごく明るくてちよつとエツチな人…部長の花井くんと付き合ってるって噂なんだけど…本当かなあ。

「三橋い、どったの？なあんか暗いぞ？悩み？ほら、言ってみ？？」

「うん…：あのね、実は、す、好きな人に」

「あっ！花井く…！おっはよう…！あ、ちよつと待ってよお！逃げるな花井い！三橋、ごめん！また後でね！」

「そのっ…想いを、伝え…って、ちよつ、田島くん！あうう…」
相談に乗ってもらおうと思ったのに…話を聞いてもらえると聞いたのに…田島くんは花井くんのもとへ行ってしまった。前方にイチヤつく田島くんと花井くんが見える（ちよつと田島くんの一方的気味だが）。二人とも笑顔で楽しそうだ。なんとなく空を見ようと視線をそらしたその時…

（…あ、れ？ウソッ！？な、なんで…）

なんと田島くんと花井くんの脇に水谷くんと栄口くんが手をつないでいるのが見えた。しかも田島くん達みたいになにごく幸せそうに。

（…：栄口くん…：なんで…）

――部活後・部室――

その日は一日中頭からモヤモヤが消えなくて調子が悪かった。部活後はなんかダルくて、着替える気さえ起こらなかった。まあ着替えないと帰れないので、部室でノロノロ制服に着替えていると、みんな

なさつさと帰ってしまい、栄口くんと二人きりになった。どこか気まずくて、なんとなく今朝の話を試してみた。

「ね、ねえ、栄口くん、あ、朝…えっと…」

「朝？なんかあったっけ。」

栄口くんはキョトンとしていた。質問の仕方が悪かったみたいだ。

「あの、その……み、水谷くん、と……手……」

「水谷？……ああ、三橋見てたんだ。三橋って鈍臭いから気付かないと思ってた！そうか、見てたかあ。ふうん……」

栄口くんは感心するように答えた。鈍臭いかあ……それにしても栄口くんの反応は普通だった。でも僕は違う。

「栄口くんヒドイよ…」

言ってしまった。

「え！？なんで泣くんだよ！」

「……僕との約束、忘れちゃったの？」

涙声で言うと、栄口くんは何か気付いたように、目を泳がせた。

「えっと…」

部室が無音になった。

「き、今日も、部活きつかった、ねえ」

「あ、うん…」

あちゃ、やってしまった。結局、話すことがなくなって、お互い黙ってしまった。

—ガチャツ

「おう、阿部じゃん」

「よっ、栄口。…と、三橋。」

突然阿部くんが入ってきた。その時、自分が上半身裸だったことに気付き慌てて隠した。

「……三橋着替えんの遅いから先行くね。それに……邪魔みたいだし、水谷待たせてっから！」

栄口くんはいそいそと出ていってしまった。

「えっ、ちょっ、さか、栄口くん！？あっ、ねえ、お願い！待って

…よ…。栄口くん……」

そんな言葉は届くはずもなく、栄口くんの姿は夜の闇へと消えていった。しばらく外を見ていると、

——バァァンッ！

背後からロッカーを殴る音が聞こえた。……阿部くんだ。しかも怒ってる。恐い。妙な静けさが部室を包み込む。

「栄口栄口ってうるせえんだよ」

「ええっ！？……あ、阿部く」

阿部くんの唇が、そつと僕の口を押さえる。両手を捕まれ、ロッカーに押しつけられて身動きができない。唇が離れると、阿部くんは姿勢を正した。

「三橋、オレ、お前が好きだ」

「……えっ……？えつと……う、わ……あ、阿部く、ん……ん！……はあっ……」

阿部くんの舌が僕の舌と絡み合い、きれいな銀色の糸をひいた。さつきと違って、濃くて優しい深いキスだった。

「はあ、はあ……阿部くん……今日、なんか、変……」

「だって……お前が栄口ばっか見るから」

「そ、それって……ヤ、キモ、チ？」

「あゝ！！うっせえ！」

僕は言葉が出なかった。阿部くんは顔を赤らめてそっぽを向いた。それが凄く意外で、嬉しかった。こうなったら正直に言おう。

「あの、さ……阿部くん、ちょ、ちよつと、勘違いして、ない、かな？」

「はあっ！？勘違い！？何を！」

阿部くん、勘違いしてる。でもそれが可愛かった。

「う、うん。僕の、好きな人……さか、栄口くんじゃ、ない、よ？」

「はっ！？じ、じゃあ田島かつ！？」

「ち、違うよ！あのう、その……あ、あ、阿部くん……なんだ……あの、す、好きな、人……」

「三橋い…」

ぎゅう…阿部くんに抱き締められる。幸せだった。あ、阿部くん…可愛いなあ…

「好きだよ、三橋…」

―帰り道―

今日は色々あったなあ。田島くんに逃げられて(?)阿部くんに勘違いされて…あ、そういえば…

「ねえねえ、あ、阿部くん、その、なんで、栄口くんと、か、勘違い…」

阿部くんが僕を睨み付けた。ヤバ、怒らせたかなあ。

「…朝、その…お前が水谷と栄口見て悲しそうな顔してただろ。オレ後ろから見てたんだ。それにさっきも部室で二人きりだったし。」

「あ、あのう…そ、それも、勘、違い…」

阿部くんは顔を真っ赤にしながら、

「ま、またあ!?!…次はどんな勘違い?」

と、笑いながら言った。

「えっと、それは、僕と栄口くんは、か、片思い同盟く、組んでて、告白は、その、同じ日に、しようって決めてたのに、さ、栄口くんが…先に、ん!ん…」

僕の口をふさぐ甘いキス。唇が離れると、阿部くんは優しくこう言った。

「もうわかったからさ。ゴメンな。…手、つなごうぜ。」

「う、うん!」

夜空の月が、そっと、僕らを照らした。

―僕らの距離。今は0cm―

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3155a/>

僕らの距離

2010年12月14日20時58分発行